

高いものを要求されるのに対し、本法では抗HCGのみしか必要としないので反応系が単純化され尿中非特異物質の干渉が少なくすむ可能性がある。

1) 研究目的：まず定性的妊娠診断法としての価値を検討するため、一般に偽陰性の多い妊娠2カ月の陽性率を検討した。つぎにこのような簡便迅速(3分)なスライド法で尿中HCGの定量が可能かを検討した。

2) 研究方法：妊娠2カ月の正常妊婦尿40例につき陽性率を調べた。つぎに各時期の正常妊婦尿40例につき倍数稀釈後定量を行ない、同時に同一尿で行なったGonavisによる定量値と比較した。また異常妊娠(流産、絨腫など)例につき定量を行ない、予後判定上の臨床的価値を検討した。

3) 研究成績：妊娠2カ月妊婦の陽性率は従来の妊娠反応と同等かそれ以上である。30例の非妊婦で偽陽性は全く認められなかった。正常妊婦尿の本法による定量値は同時に同一の尿で行なったGonavisによる定量値とよく相関し、これと代用できるものと思われる。流産の予後判定、絨毛性腫瘍の診断、追跡にも利用できたが、これらの場合における私共の診断基準についても述べる。

14. **Vaginal Cytogram** による切迫流産予後判定の試み(第2報)——尿中ホルモン測定値との関連について

(埼玉中央病院) ○青木 淳一, 佐々木寿男

(研究目的)：昨年の本大会でわれわれはVaginal Cytogramにより切迫流産の予後判定を試み、非感染例で約80%の適中率をあげる成績を得た。今回Vaginal Cytogramを採取した症例について、尿中HCG, Estriol, Pregnanediolの定量を行ない両者の関連を検討した。

(研究方法)：妊娠16週までの切迫流産患者の腔側壁(入口部より前 $\frac{1}{3}$ 附近)より、週1回Vaginal Cytogramを決定し同時に上記の定量を行ない、両者の関連を追求した(この表示法は前年度の発表方式に従った)。

(研究成績)：17例(妊娠継続9例、流産8例)の入院患者について、Vaginal Cytogramの算出および尿中HCG(HAIR), Estriol(XAD-2法)およびPregnanediol(Klopper-神戸川法)の定量を行なった。腔内感染を有する症例は本項の検討には不適当なので今回の研究からは除外した。個々の係数との関連で特に指標となし得たのはK Iで、HCGについては1日の尿中HCGが低単位のもの程、K Iは上昇するように思われた。Estriolについても同様で、1日の排泄量が1 $\mu$ g以下の症例についてはK Iの上昇したものに流産傾向がみられたようであった。Pregnanediolについては一定の関連は認められ

ないようであった。なおこれら相互の関連について、引き続き種々検討中である。

15. 子宮運動に及ぼす塩酸ヒドロキシジン(アタラックス-P)の影響、ならびにその切迫早産への応用。

(鳥取大) ○高橋 俊一, 富永 好之  
山根 俊夫, 前田 一雄

塩酸ヒドロキシジン(Atarax-P)は、主な薬理作用として中枢神経系の鎮静作用と抗ヒスタミン作用を有している。本物質の子宮運動に対する影響と臨床的な応用を検討した。まず、ウサギ生体子宮運動を記録し、静脈内注射による全身応用と、側脳室内注入による中枢応用の影響を比較した。臨床面では切迫早産の診断で入院し、明らかに異常な子宮収縮が認められた妊娠8カ月以上の妊婦に塩酸ヒドロキシジン100mgを点滴静注し、外測陣痛計による子宮収縮曲線と胎児心拍数を記録し分娩時までの経過を観察し薬物の効果を追求した。ウサギに静脈内注射と側脳室内注入を行なったが、本物質はすべての状態の子宮運動を抑制した。臨床面では21例に応用し有効16例、無効5例(うち3例はすでに破水)であった。以上、塩酸ヒドロキシジンは子宮運動に抑制的にはたらし、その機序は中枢を介するものもあると考えられる。本物質の精神安定作用とあいまつて、臨床面での切迫早産への効果が期待され、黄体ホルモンとの併用はさらに効果的であることが今回の実験結果からも予想される。なお投与せる全ての症例で胎児に対する悪影響は認められなかった。

16. 習慣性流産、不妊に関する免疫学的研究(cytotoxicity test について)

(東京医大) 藤原 幸郎, 小坂 順治  
○大見 博道, 劉 松森

研究目的：不妊および流産の原因は未だ不明な点が多く、多方面からの研究がなされているが、われわれは免疫学的立場からこの問題に検索を試みた。すなわち妊娠を広い意味での同種移植と考えて、夫婦間の組織適合性検査を特にlymphotoxicity testを用いて夫婦間の適合性を検討した。

研究方法：この検査法の原理はリンパ球細胞表面の抗原と抗白血球抗体(N I H分類)とが反応した抗原抗体結合体に補体が結合し、リンパ球の細胞溶解状態をトリパンプル溶液の染色性で判定し、適合性を知ろうとするものである。対照として2人以上子供を有し、流早産および中絶の既往のないもの7組、不妊は結婚3年以上を経て子供のないもので、従来の検査により異常を認め